

児童とのより良い関わりを支援する、若手教員に向けたハンドブック『応援ナビ！』の作成と活用

— 学校生活における小さなトラブルへの対応に関する
「若手教員」「中堅教員」への実態調査とその分析を通して —

長期研修員 西田 麻規

《研究の概要》

本研究では、はじめに、総合教育センター基幹研修該当者を対象に、若手教員の悩みや課題の把握と中堅教員が実践している指導・支援の工夫を把握するための、実態調査を行った。次に、その結果を分析し、いじめにつながる可能性のある小さなトラブルの解消と、児童とのより良い関わりを形成していく際の支援についての提案を、若手教員に向けたハンドブック「応援ナビ！」にまとめた。これを、授業、若手教員への指導・助言場面、校内研修の3つの実践において活用した結果、組織的な対応に向けた教職員の意識が向上するとともに、児童とのより良い関わりへの気付きを促すことができた。

キーワード 【教育相談 小学校 組織的な対応 校内研修 いじめの未然防止】

群馬県総合教育センター

分類記号：F 0 9 - 0 1 平成 2 6 年度 2 5 2 集

I 主題設定の理由

文部科学省から「いじめの防止などのための基本的な方針」（2013）が示され、それを受け出された群馬県の「いじめ防止基本方針」（2013）では、児童生徒主体のいじめ未然防止の重要性が述べられている。また、国立教育政策研究所の「いじめのない学校づくり」（『生徒指導リーフ』増刊号 2013）では「個々の教師の勝手な判断や言動により、ささいなトラブルが深刻ないじめへとエスカレートする」ことを指摘した上で、全ての教職員がいじめの未然防止に組織的に取り組む学校体制を構築していく必要性が述べられている。このように、いじめ対策においては、児童生徒が自主的にいじめを解決することが大切であること、教職員一人一人の指導力向上と、組織のよさを生かした取組が求められている。

群馬県総合教育センターにおいて、義務教育研究係が平成25年に初任者研修該当者を対象に行った調査によると、初任者は授業に次いで生徒指導の悩みを抱えていることが明らかとなり、基幹研修受講者に行った調査からは、一人で課題を抱え込む傾向のある若手教員の実態が浮かび上がった。今後、ベテラン教員の大量退職と同時に、多くの新規採用者の増加が予測され、この先数年で学校現場の風景が変わると言われる中で、若手教員の育成が急務となっている。また、小学校所属の長期研修員に、組織的な取組や校内研修についての聞き取りを行ったところ、生徒指導の内容をテーマにした校内研修は行われず、職員会議などでの情報交換に留まっていることから、組織的に対応することの大切さに気付く取組が課題であることが分かった。

これらの実態を踏まえ、本研究の推進に当たり、次の2点が課題であると考えた。1つ目は、いじめとして認識される以前のけんかやもめ事の段階で、個と集団に対し、教師が児童の気持ちを受け止めた対応を行えば、いじめの未然防止につながるのではないか。2つ目は、問題が起こった時はもとより、児童への対応に困った時、職員が組織で解決しようとする協働体制があれば、当該児童も教員もより良い解決策を見いだせるのではないか、ということである。

そこで、課題解決に向けた手立てとして、若手教員と中堅教員に対し、学校生活における小さなトラブルの解消とより良い児童との関わりをしていく際の実態調査を行うことにした。若手教員に対しては、児童と関わる上での悩みや課題を調査し、中堅教員に対しては、児童への指導・支援の工夫を調査する。これらの結果を分析し、児童とより良く関わるための支援についての提案と、組織のよさを生かした対応の提案をハンドブック「応援ナビ！」にまとめる。「応援ナビ！」では、小さなトラブルへの対応として“危機管理編”“日常編”“組織での対応編”とに分け、若手教員のニーズに合った提案を目指す。

以上のように、「応援ナビ！」を児童との関わりに悩みを持つことが多い若手教員の課題解決のための支援資料として用いるとともに、校内研修の中でも活用することで、組織のよさを生かすことの大切さを教職員同士が共通理解し、児童とのより良い関わりに資することができるであろうと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校の若手教員が直面する生徒指導上の諸課題への対応を支援するためのハンドブック「応援ナビ！」を作成・活用することを通して、児童一人一人とより良く関わることと、組織のよさを生かした対応の大切さに気付くことができることを、実践を通して明らかにする。

III 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「児童とのより良い関わりを工夫している教員」について

本研究においては、児童が安心してやる気を發揮し、愛情にあふれた温かな人間関係を育む学級を目指して指導を工夫する教員捉える。また、生徒指導に係る課題に直面した際、同僚と解決策を模索し、対応することの大切さに気付いている教員と捉える。

(2) 「小さなトラブル」について

本研究においては、学級の中で起こる、児童間のけんかやもめ事のことで、「いじめ」に至る以前の状態であると捉える。こうした小さなトラブルをそのままにしておいたり、児童の心情への配慮に欠けた対応を続けたりすることで、学級がうまく機能しない状況になると考える。そこで、どの学級でも起こるような小さなトラブルを早期に発見し、手立てを打ち出し、解決に導いていくことが、いじめを起こさせない学級づくりにおいて大切だと考える。

(3) 研究構想図



2 先行研究とのつながり

(1) 群馬県総合教育センター「トラブル防止マニュアル～保護者の信頼を得るために～」(2009)との関わり

この研究は、平成19年度に群馬県総合教育センターが県内公立全小・中・高等学校の学年主任と初任者を対象に「保護者対応に関する調査」を実施し、保護者から信頼を得るために対応のポイントや予防につながる取組を示したものである。教員と保護者の会話が吹き出しが書かれており、読みやすい構成になっている。また、職員全員で取り組める「トラブル防止研修セット」がある点も、組織的な対応が必要な生徒指導において参考にしたいと考えた。上記の調査は保護者に関しての内容であることから、同様の形態で、対象を「小学校」「小さなトラブル段階での対応」「担任としての対応」を対象として、小学校若手教員にも分かりやすい形でまとめたいと考えた。

(2) 群馬県総合教育センター「学校におけるいじめ問題の初期対応に関する調査研究～相談機関で対応した事例の分析を通して～」(平成20年度長期研修員の研究)との関わり

この研究は、群馬県総合教育センターにおいて、平成18年4月から平成20年3月までに子ども教育支援センター及びいじめ対策室で対応した相談事例の分析を通して、いじめ問題の適切な初期対応が示されている。月別、学年別の相談件数のデータや、保護者が学校に対して不安や不満を感じる場面などを明らかにしている。いじめを含む問題行動への初期対応については、本研究において重視したいことから、参考にしていきたいと考える。

3 教材の概要

(1) 教材に係る実態調査と考察

本ハンドブック「応援ナビ！」の特色の一つは、群馬県の基幹研修受講者の実態や若手教員のニーズを反映している点である。本研究においては、「若手教員」「中堅教員」「ベテラン教員」を、「ぐんま教職員ステージアップシステム」が示すライフステージに合わせて、以下の表1のように捉える。「若手教員」と「中堅教員」に対し、同じ質問項目を含むアンケート調査を実施することにより、両者の共通点と相違点を明らかにする。また、自由記述欄の中で、「若手教員」からは児童との関わりについて知りたいことや抱えている課題を、「中堅教員」からは指導・支援の工夫を、明らかにしたいと考える。さらに、「ベテラン教員」に対し、児童との関わりについてのコツや、トラブルの解消に向け、これまで取り組んできたことについて調査を行う。これらを踏まえてハンドブック「応援ナビ！」を作成することにした。

表1 研究対象について

アンケート調査	調査対象	ぐんま教職員ステージアップシステム	アンケート調査の内容	期日
	初任者研修該当者（128名）	“基礎形成期” ↓ 本研究における 「若手教員」	児童との関わりについて困っていることや知りたいと思っていること	7月1日
	3年目経験者研修該当者（156名）			6月13日
	10年目経験者研修該当者（66名）	“資質充実・発展期” ↓ 本研究における 「中堅教員」	児童との関わりについて、工夫したり実践したりしていること	6月2日
	15年目経験者研修該当者（16名）			5月30日

アンケート・聞き取り調査	調査対象	ぐんま教職員ステージアップシステム	聞き取り調査の内容
	<ul style="list-style-type: none"> ・H26年度長期研修員（24名） ・H26年度に群馬県総合教育センターの講師をした小学校教員（2名） ・市町村の初任者研修担当教員経験者（2名） 	“資質円熟期” ↓ 本研究における 「ベテラン教員」	児童との関わりについてのコツや、これまで実践してきたこと
研究協力校の教職員（20名）			「校内研修プログラム」の検証
・スクールカウンセラー（1名）			

① 「指導のタイプ」について

「学級経営の充実に向けて」(群馬県教育委員会 2013) は、「教師がどのような姿勢でどのように子どもたちとふれあっているかを自己点検すること」「教師の言動が子どもたちのモデルになるよう心がけること」とあり、教職員の姿勢そのものが児童に影響を与えることを指摘している。

そこで、調査では、自分自身の指導のタイプが、「指導重視タイプ」「援助重視タイプ」「指導と援助のバランスタイプ」のいずれに当てはまるかを選択してもらい、併せて、指導の際に自分の指導タイプを意識しているかを調査した。

アンケート結果から、経験を重ねるにつれバランスタイプが増え、援助重視タイプは減っていく

傾向にあることが分かった。

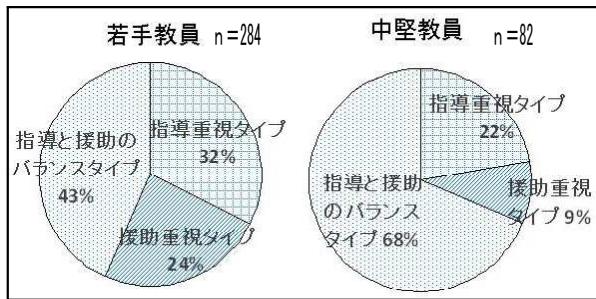


図1 指導のタイプ

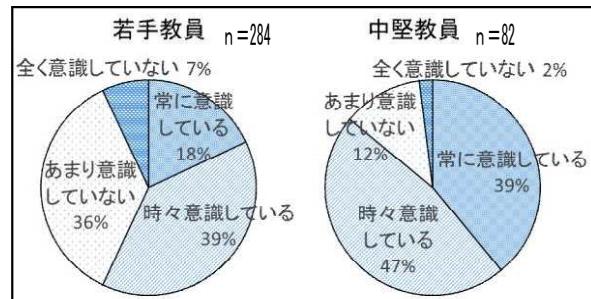


図2 タイプの意識

これは、指導・援助の両者を自分の資質として兼ね備えることの必要性に気付いた結果、中堅教員になるほどバランスタイプが増えることになったのではないかと考える。それに伴い、自分の指導タイプを意識して児童と関わっていると言える。

② 「日常での指導の工夫」について

予想の段階では、日頃の重視している取組の上位3つを選択することで、若手教員は「児童との時間づくり」、中堅教員は「授業の工夫」が多く選択され、相違点がはっきりするのではないかと考えた。結果は予想通りで、調査全体の中で若手教員と中堅教員の意識の差が最も明確に表れた項目だった。中堅教員は「分かりやすい授業の工夫」が1位であった。(若手教員37%、中堅教員73%)

「児童との時間を作る」が、若手教員の35%に比べ、中堅教員は18%であるのは、授業時間が充実しているため、あえて選択しなかったのではないかと考える。また、若手教員は「児童の話をよく聞く(50%)」「授業中の規律(51%)」と同じように選択している。

上記の結果を踏まえ、「応援ナビ！」においては、児童の学校生活における具体的な場面を設定して提案していく。児童の変化を見逃さないは、若手も中堅も35%前後の人人が選んでいることから、日々の関わりの大切さに気付けるポイントを提案できるよう努めたい。

③ 「小さなトラブルに関して対応に困った事例」について

小さなトラブルには発達段階による特徴が見られ、解決の仕方も変わってくる。そこで、調査の際に該当学年を記載してもらうことで、トラブルの内容と児童の言動を分類・考察し、それに合う解決方法の提案につなげたいと考えた。

そこで、対応に困った小さなトラブルについて、自由記述による調査を行い、得られた320件の事例を、ブロック別と、内容別の2回分類した。前者は、若手教員の「発達段階に合った授業を提案してほしい」というニーズに応える形で、特別活動の授業案として活用した。後者は、「応援ナビ！」の危機管理編に、小さなトラブルの対応例として掲載することとした。

- ＜低学年の主なトラブル＞
- ・本当のことが言えない、事実を認めず嘘をつく
 - ・保護者が関わる
 - ・体育などのゲームの勝ち負けが原因
 - ・質問の意味が分からず、解決に時間がかかる
 - ・同級生が自分の気持ちを理解できないことが原因
 - ・行為を思い出せない、理由が自分でも分からない

“自分はどうだったか思い出して、どうすれば良かったのか考えられると良い”という視点から授業提案をしたい。

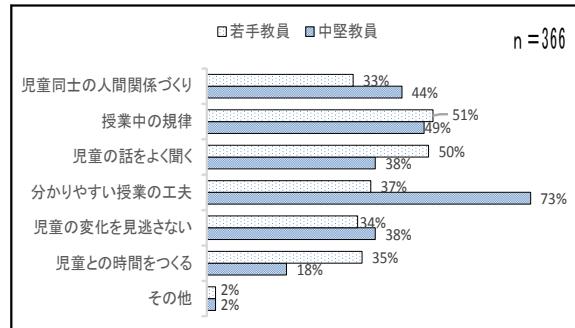


図3 日頃の取組

- ＜中学年の主なトラブル＞
- ・他学年や他クラスとのトラブルが多い
 - ・周りの目を気にし自分の非を認めない
 - ・危害を加えるなどの激しいけんか。からかい。
 - ・言いつけに来た本人に非があるなど、対応に困る
 - ・自分たちで解決しようとしない
 - ・児童同士で注意できるが、その口調がきつい

“気持ちを言葉で伝え合い、まずは自分たちで解決していくと良い”という視点から授業提案をしたい。

- ＜高学年の主なトラブル＞
- ・形式的な謝罪はできるが内面が伴わない
 - ・正論を言い合い解決が長引く
 - ・秘密をばらして相手を傷つける
 - ・周囲の動向を気にする
 - ・嫌なことがあっても相談しない
 - ・女子同士、グループ同士によるトラブル
 - ・長年の積み重ねがある偏見



“周りに流されないで自分の考えで行動できること”という視点から授業提案をしたい。

④ 小さなトラブルに関して知りたいこと

最も多かったのは「当事者同士が納得のいく解決の仕方」で35%の人が選んでいる。これは、トラブルの解決に時間がかかるために、授業や給食時間に食い込んでしまう、という悩みにもつながっている。

「いじめ防止対策推進法への対応」（群馬県教育委員会 2013）には、学級内での人間関係のトラブルが潜在化し、いじめに発展する事例があることが指摘されている。そこで、見かけ上解決したように見えるというのではなく、仕返しなどにつながらない、当事者同士が納得のいく解決について対応策を提案したい。調査からは、若手教員が保護者にどのように説明するかに苦慮している実態も分かった。

⑤ 「若手教員に必要な資質・技能」について

図6では、“一人で抱え込まない”“身近に相談できる人を持つ”が、それぞれ52%、58%と多く選択されている。生徒指導に関わる対応には、組織での対応が必要であることを、事例を挙げて若手教員が理解できるように示したい。これについては、全職員が関わる内容であることから、「校内研修プログラム」内で扱う。

⑥ 「児童と関わる時間の生み出し方」について

若手及び中堅教員も「事務的な仕事を児童の下校後に行う」が最も多かった。「時間の生み出しが分からない」は初任者19%、3年目教員16%、10年目教員8%、15年目教員0%であることから、経験を重ねることで自分なりの時間の生み出し方を工夫していると考える。

そこで、中堅教員に対し、指導・支援の工夫を調査し、若手教員が児童と関わる時間を少しでも確保するためのコツを提案したい。

また、若手教員は中堅教員に比べ同僚と仕事の分担ができていないことも明らかになった。若手教員を支援できる教職員間の協力体制を構築する必要がある。これは、「校内研修プログラム」の組織的対応の中で扱いたい。若手教員に対しては「応援ナビ！」で、先輩に助けを求めていく必要性について提案していきたい。

(2) 「応援ナビ！」の編集とその内容

① 「応援ナビ！」の内容（詳細は別添資料）

前項の調査結果を踏まえ、以下の点に留意する。

ア 県内小学校教員の実態である、本研究で行った調査の結果を生かす。

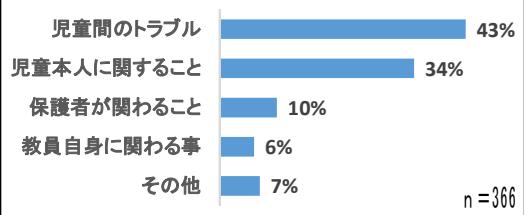


図4 内容別の分類

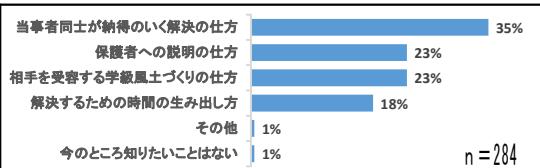


図5 若手教員の知りたいこと

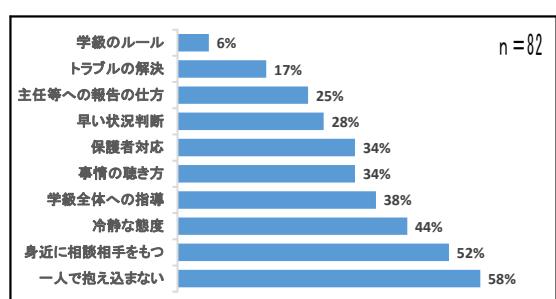


図6 若手教員が身に付けると良い資質・技能

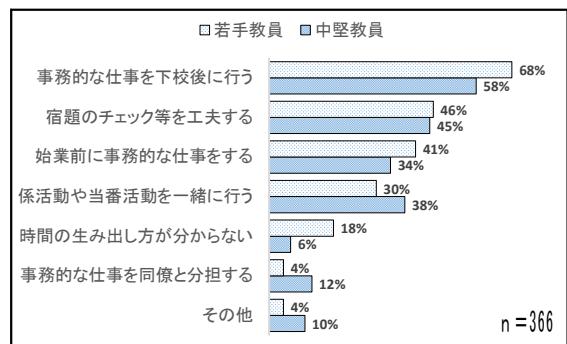


図7 時間の生み出し方

- イ 調査から得た実例や実践例を多く用い、汎用性のある対応策を提示する。
- ウ 実践に結びつきやすいよう、吹き出しなどを活用する。
- エ 1つの課題に対して、見開き1ページで対応のポイントを提案したり関連する資料を入れたりすることで、手軽に見て参考にできるようにする。
- オ これから伸びていく若手に、中堅・ベテラン教員の技能や技術を伝える役割を果たす。ベテラン教員の大量退職と同時に、多くの新規採用が予測されていることを受け、若手を指導する教員の参考資料になることも期待する。

以上の点を踏まえ、学校生活における小さなトラブルの解消とよりより人間関係を形成していく際の「若手教員」の悩みや課題を把握する実態調査と、「中堅教員」の指導・支援の工夫を把握する実態調査と分析を通して17の内容についての提案を作成した。

小さなトラブルへの対応に関し、第Ⅰ章を“危機管理編”として、5つのテーマを取り上げた。また、第Ⅱ章を“日常編”として、11のテーマについて取り上げ、児童とのより良い関わりにつながる提案を掲載した。そして、第Ⅲ章として、“組織での対応”に係る提案を行う中で、「校内研修プログラム」を紹介している。なお、「校内研修プログラム」はプレゼンテーション資料の入ったDVDに納めているため、詳細は「応援ナビ！」の別添資料としている。

表2 「応援ナビ！」の内容構成

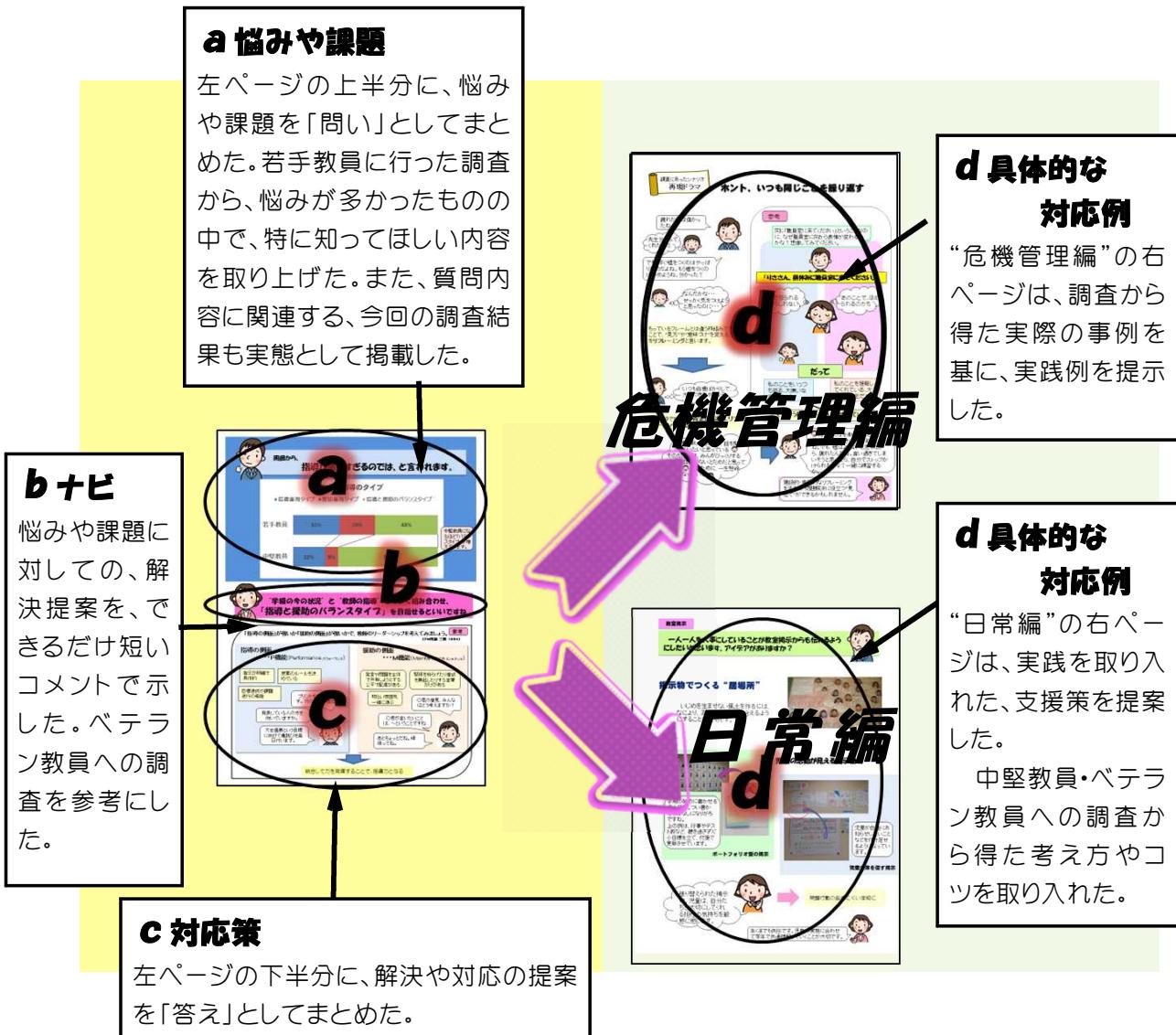
	ページ	項目	活用場面	課題解決の参考にした考え方など
第Ⅰ章	3	児童本人に関すること	個別指導	傾聴の技法
	5	児童間のトラブル	休み時間	
	7	保護者が関わること	保護者	
	9	教員自身に関わること	教員自身	
	11	その他の悩みに関わること	日常場面	
第Ⅱ章	13	いじめのヒヤリ・ハット	日常場面	聞き取り調査
	15	気付きのタイミング	個別指導	聞き取り調査
	17	若手教員の悩み	教員自身	諸調査
	19	日頃の取組	授業場面	生徒指導の3機能
	21	ほめ方・注意の仕方	日常場面	自己肯定感
	23	指導のタイプ	教員自身	ルールとリレーション
	25	時間の生み出し方	教員自身	聞き取り調査
	27	教室掲示	年度始め	取材
	29	特別活動の授業：低学年の学級活動	授業中	C S S (学級ソーシャルスキル)
	31	：中学年の学級活動		S F A (ソリューション・フォーカスト・アプローチ)
	33	：高学年の学級活動		アサーション
第Ⅲ章	35	組織対応	校内研修他	インシデント・プロセス法

③「応援ナビ！」の構成（詳細は別添資料1）

扱う内容は、若手教員に行ったアンケート調査で、悩みや疑問が多かったものを絞った。その中で、中堅教員やベテラン教員への調査等を生かして、特に知っておくと良い内容を精選して記載した。また、ポイントを分かりやすく伝えることができるよう、字体を変えたり枠を変えたりした。さらに、調査から得た具体的な事例を取り上げ、その対応策を、ベテランへの調査を基に提示した。

“アイメッセージ”や“リソース”といった、手立てとして取り上げた教育相談に係る用語の解

説などについては、コラム欄として特記した。



④ 「校内研修プログラム」の開発とその内容

ア 校内研修プログラムの内容

組織のよさを生かした取組の提案を、「応援ナビ！」の第Ⅲ章“組織での対応”で取り上げた。その中で、「応援ナビ！」をテキストにした「校内研修プログラム」を紹介している。「校内研修プログラム」は、グループワークを用い、教職員同士が学び合う研修にすることで、多様な気付きを促し、全職員で取り組んでいこうとする意識を高めることができると考え、以下の点に留意して作成した。

- ・ 事例を通じ、児童と関わる上での基本的な姿勢について理解できるようにする。
- ・ 参加体験型の研修にすることで、若手教員は先輩から、ベテラン教員は後輩から、関わり方のよさを学ぶことで、組織的に対応することの大切さに気付けるようにする。
- ・ 児童への対応例や客観的な資料を提示する場面で、ハンドブック「応援ナビ！」に掲載した内容を用いる。
- ・ 2部構成とし、前半は個人で対応する場面を研修するために、ロールプレイを通して意見を出し合う。後半は、組織的な対応のよさに気付けるように、1つの事例についてグループワーク（インシデント・プロセス法）を通して意見を出し合う。
- ・ 研修時間は、標準的な校内研修の時間を想定し、90分間とする。

表3 「校内研修プログラム」の内容構成

パート	項目	概要	ねらい	「応援ナビ!」 対応ページ
	表紙			
	目次			
1	I より良い関わりのポイント理解 1 調査の概要	若手教員は児童間の対立、中堅教員は児童の特性に合った指導法についての悩みを抱えている。	○悩みや課題をチャンスに変えることが大切であることに気付く。	17
7	2 ロールプレイ	休み時間のトラブルの解決が、授業時間に食い込んでしまいそうな場面において、どのように解決するかを話し合う。	○授業開始直前のトラブルへの具体的な対応を考える。	5、6
16	3 受容・共感	児童の気持ちを大切にした非言語的コミュニケーションを含む受容的な対応を、事例を基に考え、近くの人と交流する。	○気持ちを受け止めることができ、まずは大切なことを知る。	3
18	4 繰り返し・要約			
20	5 感情の明確化			
25	I 組織的な対応の ポイント理解 1 必要な資質	調査結果から、一人で悩みを抱えがちな実態があることを提示し、組織で対応する必要性を実感してもらう。	○悩みを一人で抱え込まず、相談することが大切なことを共通理解する。	9 10 35
30	2 グループワーク	複数の児童、保護者、教師のかかわる問題場面を設定する。少人数グループに分かれて、インシデントプロセス法による事例研究を行う。	○インシデントプロセス法による事例研究を通し、日常場面でも応用できることを知る。	
38	3 日常の取組	群馬県教育委員会から出されている「見守りシート」や、児童の記録の実物を提示し、記録を残していくことが大切であることを確認する。	○児童の変化を知るためにだけでなく、引き継ぎや共有の面からも、記録を残すことが大切であることを知る。	
41	III 振り返り・まとめ 1 まとめ	言葉ひとつで、状況が良くも悪くも変化することから、「贈り物を手渡すように使いましょう」という提案でまとめる。	○これから児童との関わりについて振り返ることができる。	



図8 「校内研修プログラム」(スライドの一部抜粋)

イ 「校内研修プログラム」のスライドの構成（詳細は別添資料3）

ノート

そのまま話せるノートを準備した。番号はクリックするタイミングとした。音声もクリックするだけで出るようにした。

スライド画面

シートの上部は、スクリーンに映るスライド画面を表示した。これにより、プレゼン場面に迷わないようにした。

時間の表示

途中、時間を計測する必要のあるグループワークが入るため、スタートからかかる時間を表示した。

IV 研究の計画と方法

1 実践の概要

「応援ナビ！」を、「特別活動の授業」「若手教員への指導・助言場面」「校内研修」の3つの場面で活用した。

(1) 「応援ナビ！」を用いた授業の実践

対象	第2学年
実践期間	平成26年 12月5日
題材名	休み時間楽しく
ねらい	たのしい休みじかんにするほうほうをかんがえよう
「応援ナビ！」 対応ページ	ナビ14 学活の授業 (29ページ) 「児童間のトラブルに関連して、課題に合った授業を行いたいと思います。 低学年では、どんな学活の授業が考えられますか？」
備考	自分の言動を振り返る内容にすることで、形式的な謝罪ではないトラブルの解決方法を知らせたいと考えた。「学級生活で必要とされるソーシャルスキル(CSS)」の“関わりのスキル”を参考にして作成した。

対象	第4学年
実践期間	平成26年12月5日
題材名	友達の良いところ、自分の良いところ
ねらい	自分のよさをみんなのために役立てよう
「応援ナビ！」 対応ページ	ナビ15 学活の授業 (31ページ) 「児童間のトラブルに関連して、課題に合った授業を行いたいと思います。 中学年では、どんな学活の授業が考えられますか？」
備考	トラブルの解決において、自分のよさを生かす方法に目を向けさせることで、高学年や中学校での般化につながると考えた。ソリューション・フォーカスト・アプローチの“リソース”を生かして、自分にできることを考えさせる。

対象	第5学年
実践期間	平成26年11月25日
題材名	相手の立場を考えて
ねらい	自分の思いをさわやかに伝えよう
「応援ナビ！」 対応ページ	ナビ16 学活の授業 (33ページ) 「児童間のトラブルに関連して、課題に合った授業を行いたいと思います。高学年では、どんな学活の授業が考えられますか？」
備考	友達との関わりが、複雑化する時期であることを考慮し、アサーショントレーニングで用いられる“アイメッセージ”を取り上げ、日々のコミュニケーションに生かせるようにしたいと考える。

(2) 「応援ナビ！」を用いた若手教員への指導・助言場面での実践

今年度、研究協力校において、職場における指導であるOn the Job Training (以下、OJTと表記する)の一環として、教職経験2年目の若手教員への指導・助言を、年間を通して定期的に行ってい。若手教員の授業参観や授業支援を行った日の振り返りなどにおいて、「応援ナビ！」を用いた助言を行い、若手教員の新たな気付きを促した。

具体的な場面として一例を挙げると、は、学期の始めに、ルールとリレーションのページを使って、学級の約束事について一緒に考えた。また、児童の気持ちが落ち着かずトラブルが続いている時に、トラブルが起こりやすい時期のデータを示したり、当該学年で多いトラブルの原因や発達段階の特徴を掲載したページを用いたりして、トラブルの解決に向けた対応策について一緒に考えるきっかけにした。

(3) 「応援ナビ！」を用いた校内研修の実践

対象	研究協力校職員
実践期間	平成26年9月8日 15:15～16:45 (90分)
研修名	「校内研修プログラム」
研修の目標	より良い児童との関わりについての共通理解を図るとともに、多面的・多角的な気付きを促すワークショップを通して、組織的に対応することの大切さに気付く。
使用する 「応援ナビ！」 の主な内容と そのページ	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの受け止め方 (3、4ページ) ・授業開始直前のトラブルについての解決 (5、6ページ) ・先輩教員への相談 (10ページ) ・若手教員の抱えている悩み (17ページ) ・若手教員に必要な資質・技能 (35ページ)

2 検証計画

検証の視点	方法
“第Ⅱ章 日常編”を活用した学級活動(2)の授業において、児童が学習したことを日常生活に生かし、自己有用感を高めることができたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・発言 ・ワークシート ・日常の観察
「応援ナビ！」は、若手教員が児童とより良い関わりを工夫する上で役立ったか。また、若手教員への指導・助言場面において、「応援ナビ！」を用いた支援が有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・若手教員からの聞き取り ・C & S 質問紙の変容
「応援ナビ！」を用いた校内研修の実施は、児童との基本的なかかわり方の共通理解を図り組織のよさを生かした対応の推進に役立つたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・研修中の様子 ・研修後のアンケート調査

3 実践

(1) 「応援ナビ！」の実践

① 授業における活用（詳細は別添資料2）

ア 低学年における学級活動(2)での実践

この提案を基にして行った授業実践

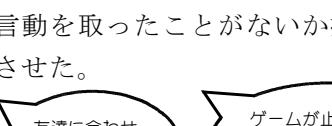
調査から得られた課題	自分の言動を思い出して、どうすれば良かったのか考えられると良い
授業のねらい	たのしい休みじかんにするほうほうをかんがえよう

主な学習活動	手立てと児童の姿・反応	若手教員の気付き
<p>1 課題の意識化 (5分)</p> <p>○ 楽しい休み時間にしていく気持ちを高める。</p>	<p>○ “最高に楽しい休み時間”を想起し、その時の自分や友達の様子をイメージさせる。児童は、けんかになって楽しくない休み時間になりそうな時、状況を開拓しようという気持ちを持つことができた。</p> 	<p>良いイメージをもたせて、そこに向かって話し合わせるのは、子どもたちにも分かりやすいと思いました。</p>
<p>2 話合い活動 (35分)</p> <p>○ 仲直りできる場面を見つけ、セリフを考</p>	<p>○ 「ここがなければけんかにならなかつたのに」という部分を見つけ、丸で囲ませた。隣の人や近くの人と相談して良いことを伝えると、一つずつ確認する</p>	<p>ワークシートにセリフがないところが1つあり、</p>

<p>える。</p>	<p>姿が見られた。</p>	<p>対応を考えるのが難しいかと思いましたが、自分たちでセリフを加えていて、感心しました。</p>
<p>○どんなセリフや行動に変えたらけんかにならなかつたかに ならなかつたか考え る。</p>	<p>○この言動をどう変えたらけんかにならなかつたか、について、一つずつ下から考えるよう促した。「自分で考える→近くの人と交流→発表」を1箇所につき3分程度で行った。出た意見は板書し、元のセリフに解決したことを見出し〇印を貼った。</p> <p>ここで、タマちゃんはどうすればよかつたのでしょうか。 やめてって言う。 やめて、そんなこと言わないでって言う。 そうか、そう言えばけんかはここでストップしたはずだね。はい、解決。〇を貼るよ。</p>	<p>進み方をひとつひとつ丁寧にやっていくと、こんなにも意見が</p>
<p>3まとめ(5分)</p>	<p>○本時で確認した、けんかになつても最高の休み時間に変身させる方法をまとめた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きく深呼吸して気持ちを落ち着けること。 ・自分はどうだったか、始めから思い出すこと。 ・仲直りのセリフを考えること。 <p>○本時の感想を書かせた。</p>	<p>出るんだなと思いました。</p>
<p>なかなかないホントはこんなにあたたんだなとめりこことがわかつたしけんかはまだめんたいなとおもつた。</p>	<p>自分がけんかしたときになかなかのセリフを考えること (まづ)</p>	<p>本時のポイントを巻物にするなど、興味を引く掲示の仕方もいいと思いました。</p>
<p>ほりじの時もなかなかのセリフを考えれば中お りもできるんだなと思いました。</p>		
<p>けんかしたときにことはいて自分の気 持ちをつたえればなかなかする。</p>		

イ 中学年における学級活動(2)での実践

調査から得られた課題	気持ちを言葉で伝え合い、まずは自分たちで解決していくと良い。
授業のねらい	自分の強みをみんなのために役立てよう

主な学習活動	手立てと児童の姿・反応	若手教員の気付き
<p>1 課題の意識化(10分)</p> <p>○学級の事前アンケート「自分によさ」の結果を基に意見を出し合う。</p>	<p>○事前アンケートを拡大提示し、学級の実態を把握させる。</p> <p>・よさにはいろいろあること、それらを選ぶ友達も偏りがないことなどから、トラブルの解決方法はたくさんありますという見通しがもてた。</p>  <p>よさをもっているだけでは伝わらないね。役立てる場面を考えましょう。</p> <p>優しい人がとても多い。友達を応援できる人も多い。</p> <p>多いところもあるし、少ないところもあって、いいところは違っている。</p>	<p>ことわざから、「けんかは嫌」にもっていくのが自然でした。事前アンケートがあると説得力があるし、日々のエピソードも交えて意見も言えるのだなと思いました。</p>
<p>2 話合い活動(25分)</p> <p>○入れない友達がいた時にどうすればよいか、「入れるのやめよう」と言わされた時にどうするかを考える。</p>	<p>○問題場面に出てくる児童の言動で、よくないと思うところに下線を引かせた。その後、自分たちも似たような言動を取ったことがないか振り返らせ、理由を考えさせた。</p>  <p>友達に合わせて、入れてあげなかつた。</p> <p>ゲームが止まるのが嫌だから気付かないふりをした。</p>	<p>A君がもじもじしていることもよくないことと考へる児童がいたので驚きました。線を引かせることで全員が</p>

<問題の場面>

近ごろドッヂボールがやり始めて、今日も12人が楽しそうに遊んでいます。鉄棒のところに、A君が仲間に入りたそうな様子でもじもじしているのが見えますが、みんな気付かないふりをしています。A君はドッヂボールが苦手で、これまでゲームを止めてしまうことがあったからです。そこへ、ドッヂボールの上手なB君が「入れて！」と元気よく近づいてきました。みんなはじゃんけんをするためゲームをストップしました。

この様子を見ていたCさんが先生に報告しました。先生は、「なぜ、A君を入れなかつたの？」と聞きました。みんなは、「A君が入りたいなんて知らなかつた。」「明日は一緒に遊びます。」と答えました。

課題を共有できました。



A君に「入れて」と
勇気出して言つてみるといいよ
と
言うのは？

それで、自分も一
緒に言ってあげるとい
いかも。

私はみんなに「A
君も入れてあげようよ」と
言うかな。

気付いたときに「A
君も入りたそ
うだ
よ」とみんなに
言う。

いつでも入れる
ルールにする。

- 各自の“よさ”と実際の行動をむすびつける。3まとめ(10分)



A君を誘うという解
策は、はっきり意見が言
える人ができそ
うだね。

よさ、というの
は、「あなたの強
み」です。

“自分の強み(よ
さ)”を「自
分のできる行
動」にもつ
っていました。
自分にできることの
内容がいろいろ
あつたし、どの
子も自己決定で
きていてすご
いと思
いました。
「自分の得意」
ではなく「よさ」
というのがいい
し、子どもたち
も「よさ」には
いろいろあるこ
とが分かつたと
思
います。「自
分の強みが知
れ
てよかつた」と
書
いている子が
いて、自分
のよ
さが分かつてよ
かつたと思
いました。

- 事前アンケートで選択した“自分の強み(よさ)”を、どう生かせるか自分で決めるよう投げかけた。



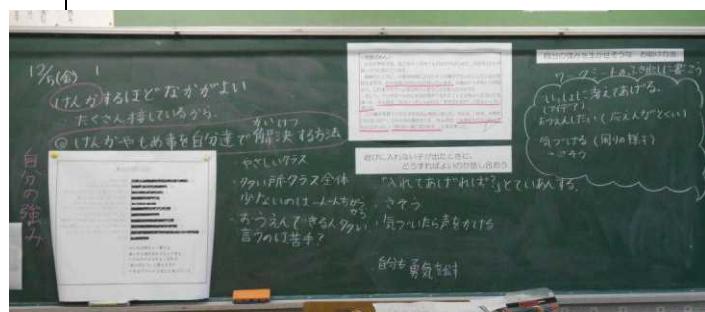
私はたかれがかけ
んかをしている時に相手
かいやな思いをしないようにう
まく言える方なのでけんかに入
ってあけで角解消させてあけた
いです。

ほくは、ありと
言うべきこと
がはきりいえのいいめいで
にやめなよふがいえ
る。



ほくは、教えるのが
といなほうよりひ
くびこま。いろいろ人に
教えてあけたいです。

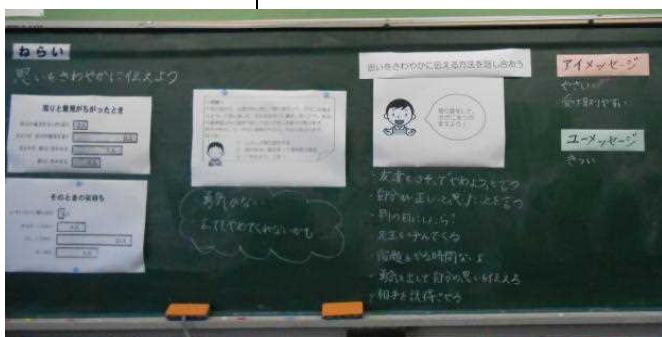
ほくはいいアイデアを思つ
キつすいきうなのでこま
いたういしょに考えてあけたい
です。



ウ 高学年における学級活動(2)での実践

調査から得られた課題	周囲の意見に流されないで、自分の考えで行動できると良い。
授業のねらい	自分の思いをさわやかに伝えよう

主な学習活動	手立てと児童の姿・反応	若手教員の気付き
<p>1 課題の意識化 (5分)</p> <p>○学級の事前アンケート結果を見て気づいたことを出し合う。</p> <p>(自分が普段取る行動と、望ましいと考える行動にズレがあったのは、半数)</p>	<p>○課題につなげたい学級の実態調査を提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでの自分を振り返り、休み時間や授業中、自分だけ意見が違っていた時や、仲よしの友達の気持ちと違うことを言う時の不安などが共有できた。 	<p>2つのグラフが関連しているので意見がたくさん出していた。学級の実態なので周囲が気になるのが自分だけではないと分かって安心した児童もいたと思います</p>
<p>2 話合い活動 (25分)</p> <p>○周囲と違う意見を言う時の不安を考える</p>	<p>○ワークシートの事例を用い、4つの選択肢から、自分が選ぶ回答と、望ましいと思う回答を考えるよう助言した。</p>	<p>建前と本音を挙げさせて、理由を話し合わせることで、実生活に近い話合いになっていました。ワークシートで「2を選ぶけど『嘘』じ</p>

	 <p>嫌われるかもしれないから、勇気が出ないよ。 注意してもやめてくれないかもしないよね。</p>	「やない」と言っていた子がいました。高学年になると、そういう細部まで友達関係に気を遣うのだと思いました。
<ul style="list-style-type: none"> ○自分の思いが相手に伝わる表現方法を考える。 	<p>○なぜ望ましい行動がとれないのかグループで話し合う時間を十分確保した。</p> <p>○望ましい回答（3番）を言う勇気はないけれど、それを選びたいという思いは伝えたい時は、どうしたら良いかについて、グループでできるだけ意見を出すよう促した。それを通し、児童は複数の対応があることに気付いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1人では言えないから、友達と一緒に言う。 休みの日に行こうなど、別の考え方を提案する。 学校に戻つて先生に注意してもらう。 ジェスチャーでダメと伝える。 勇気を出して思いを伝える。 怒られるからやめようと言う。 	いろいろな意見が出していました。「自分を正しいと信じて言う」という意見が出ていて驚きました。アイメッセージに言い換えるのは難しいと思っていたが、予想よりも児童はよく書けていました。ただ、ユーメッセージの主語を変えただけの人もいたので、共有する必要があるのだと思いました。
<ul style="list-style-type: none"> ○アイメッセージを考える。 	<p>○問題場面を、“アイメッセージ”で言い換えた言葉を出し合った。</p> <p>○板書した回答例を基に、隣の人とロールプレイを行った。</p> <p>誘う側と断る側の両者の立場を経験し、それぞれの受ける印象を共有することができた。</p>	<p>アイメッセージだと相手の気持ちを受け止めやすいね。</p> <p>アイメッセージだと、やっぱりやめようという気持ちになりやすいね。</p>
3まとめ(15分)	<p>○別の事例で、児童がアイメッセージを作ることを通し、日常生活の中で、アイメッセージを使えそうな場面自分で考えるように投げかけた。</p> <p>取り組めそうな場面 かしたものをかえしてほしいとき。 なにかをやってほしいとき。</p> <p>けんかしたしそうな時 係を決める時</p> 	<p>ロールプレイをさせたのは、日常にも生きるので良いと思いました。(別添資料には)教師のセリフが全て書かれているので、流れが想像できて、自分でも取り組めそうだと思いました。授業の内容がとても楽しそうだなと思いました。</p>

② 所属校若手教員への指導・助言場面での活用

研究協力校におけるOJTで、教職経験2年目の若手教員への指導・助言を行っている。授業参観や授業支援の振り返り場面において、意図的に「応援ナビ！」を用いてきた。若手教員を指導する側における活用場面を、若手教員の変容から検証する。（以下、「T」は筆者、「若」は担当する若手教員を指す）

初めての低学年担任で、児童の実態がつかめきれず戸惑っている時期（4月～6月）

4月23日（水）：放課後、本日の振り返り場面

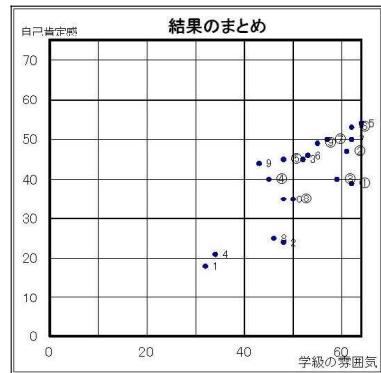
新年度が始まり、半月が経ち、最近の様子について尋ねた。すると、初めての低学年で、児童の気持ちをうまく受け止めきれないこと、提出物の処理がその日のうちに終わらないこと、児童に分かりやすく教えられないこと、作業の速さから来る個人差への対応ができないこと、困ると泣いてしまう児童がいること、などが悩みとして挙げられた。年度初めなので、まずは学級のルールを確立すると良いこと、低学年は、休み時間に一緒に遊ぶことで心の距離が近づくことなどを助言した。

5月2日（金）：5時間目

昼休み後の清掃時間、2件のけんかが起こった。関係した児童が複数いて、多くの児童が泣き出したことで、教室内が騒然となった。2件が同時に起こり、児童が興奮していたことで若手教員はどこから手をつけたら良いのか判断がつかない様子だった。仲裁に時間がかかり、授業時間が半分過ぎた頃に授業が開始した。トラブルはどの学級でも起こること、けがなどの緊急性がない場合、双方の気持ちを聞きつつ、授業開始時間は守った方が良いこと、授業後に詳しく話を聞くことを助言した。

5月16日（金）：C&S質問紙による実態調査の分析

日常の観察と併せて、学級の状態を客観的に理解するために、C&S質問紙による実態調査を5月と11月の2回行うことを探査した。5月8日に実施したC&Sの結果を基に、今後の学級経営について話し合った。結果から、学級の雰囲気や自己肯定感に差があり、学級としてのまとまりにやや欠けていることが分かった。自己肯定感の低い4名は、日常観察からも同様の傾向が見られることから、個別の声かけを重視していくことを助言した。



9月19日（金）：放課後、指導主事訪問で行う道徳の授業検討

T：毎日忙しい中で、発問計画までよく仕上げたね。頑張ったね。
若：はい。でも、集中力が続かない児童がいるから、心配です。お客様がたくさん来ると、きっとテンションが上がると思うんで。
T：今日の国語の授業も、A君の集中力が切れてしまった場面があったけど、「どうしたの？」ってちゃんと理由を聞けてたじゃない。あれ、とてもよかったです。ちゃんと気持ちを聞いてもらったから、A君も納得して授業に戻れていたよ。
若：先生が、先日の校内研修（9月8日実施の『校内研修プログラム』）の中で話していた、受容するってことを、普段から気をつけていこうと最近思っているんです。今まで、行動だけを見て、一方的に注意することが多かったので、気を付けたいと思っています。
(以下、略)

周囲の状況変化を受け入れ、努力した結果が出始めた時期（10月～12月）

10月7日（火）：放課後

T：最近、学級の様子はどう？困っていることはない？
若：実は、最近学級が本当に落ち着かなくて困っているんです。運動会が終わってすぐ描画大会で、なんだか私自身がバタバタしているからなんんですけど、子どもたちが授業中も休み時間もフワフワしていて。教育相談週間もあるし…(中略)
T：ハンドブックでちょうど若手教員の悩む時期のところを作ったのだけど、見てくれる？（「応援ナビ！」の若手の悩みページの説明）今の時期は、若手が悩みやすい時なんですね。先生だけではないのだから、落ち込まず、一緒に解決策を考えていこう。
若：あ、ここに書いてある悩み、私も同じです。
T：こういうの見ると、自分だけじゃないし、2年生にありがちなんだな、と思うかな？
若：はい。すごく興味深いです。イラストが多いのも見やすいです。
(中略)

T：困った時は一人で抱え込まないで、必ず私や他の人に相談してね。

11月4日（火）：図工、休み時間

描画大会の絵の指導について、以前より相談を受けてきたが、色塗りで非常に苦労しているとのことだった。教材研究を学年で行うことや、学年主任に進み具合の相談をしたり児童の作品を見せてもらったりなど、同僚の助けや知恵を借りること、技術を教えてもらうことなどを助言した。ただ、学年主任が近く産休に入ることから「いつまでも甘えていいでしっかりしなくっちゃ、と思うんです」と気を張っている様子がうかがえた。反面、2クラス合同で行う教科の指導や学年主任になるといった心配が表情から感じられた。「焦らず、周りの助けを借りながらやっていこう」と励ますと、「はい」と答えた。

11月18日（火）：放課後、本日の振り返り場面

「午前中に実施したC&Sの結果、全体的に上がったよ。」と話すと、「本当ですか。A君やB君、Cさんはどうですか。」と返ってきた。以前に比べ、この頃になると、学級全体だけでなく、児童一人一人への意識や配慮が非常に高まったことの分かる言動が増えてきた。放課後、授業の振り返りを行った後、2回目のC&Sの結果を提示して、これから学級経営について話し合った。

T：どんなクラスを目指している？

若：そうですね。自信がもてるクラス。この結果でいくと、まだ自己肯定感の低い子がいるので、この子とかこの子とか、もっと個別に支援していくなくちゃと思います。あとは、自分のよさを自覚できるクラス。友達もかな。人数も少ないので、よさに気付く目を鍛えたいです。

T：先生が続けている「今日のヒーロー」とか、いいよね。

学級もいい雰囲気になってきたし、友達に認められて自己肯定感が高くなった人もいるんじゃないかな。先生自身が一人一人に気持ちを向けていることが立派だと思うよ。

(以下、略)

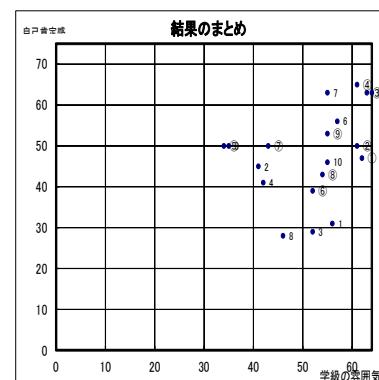


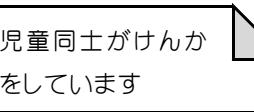
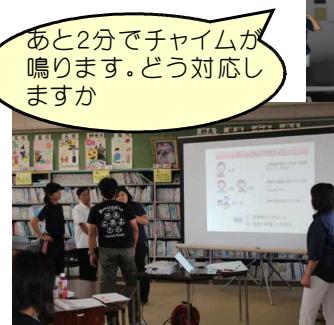
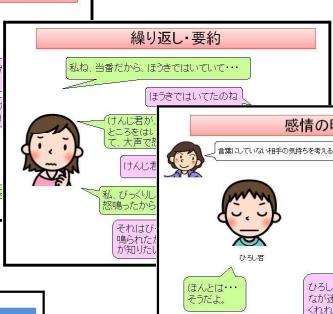
図10 11月25日のC&S分布図

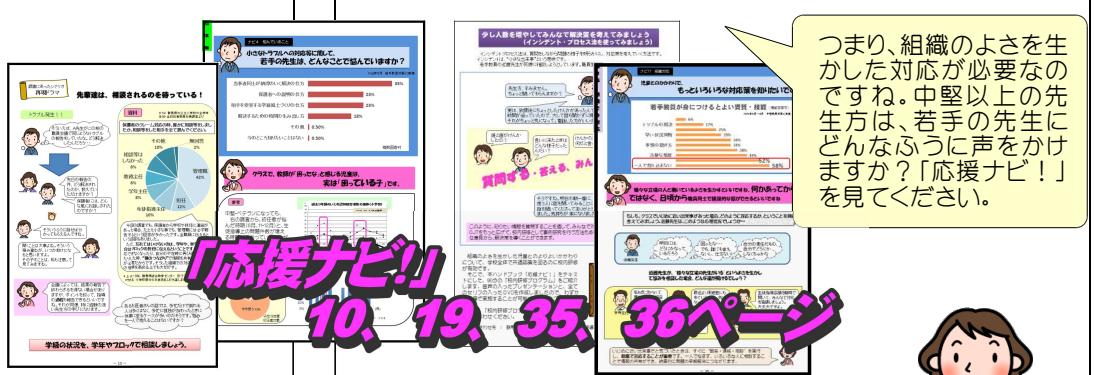
(2) 「校内研修プログラム」の実践

① 実践の対象

- ・長期研修員（小・中・特別支援学校教員 13名 8月28日実施）
- ・研究協力校（小学校教職員 14名 9月8日実施）

② 実践の内容

研修内容	時間	研修の流れ
1. ねらいの確認 ☆ロールプレイ1 【実際場面での対応】 自分だったら、どう返すかな? ☆ロールプレイ2 【気持ちを受け止める】 そうだね、嫌だったね、と共に感するかな。	2分	<p>トラブルを、児童理解を深めるチャンスと捉えていきましょう。 「応援ナビ！」を使っていきます。</p> 
2. 関わり方のポイント理解 ☆グループワーク 【組織的な対応】	40分	<p>児童同士がけんかをしています</p> <p>あと2分でチャイムが鳴ります。どう対応しますか</p>   <p>児童役の方に、先生の対応について感想を言ってもらいましょう。</p> <p>「応援ナビ！」でも、同様の場面での対応を掲載しています。5ページを開いてください。「win-winの解決」を目指せるといいですね。</p> <p>では、子どもの思いを受け止めるヒントを練習してみましょう。「応援ナビ！」の3ページも参考にしてください。</p>    <p>行動の背景にある子どもの理由を考えられるといいですね。</p> <p>「応援ナビ！」3ページ</p>
3. 組織的対応についての理解 ☆グループワーク 【組織的な対応】	45分	 <p>一人で悩みを抱え込む傾向のある若手教員の実態があります。みなさんはどうですか？</p>



**「応援ナビ！」
10、19、35、36ページ**



事例を、インシデント・プロセス法を用いて検討しましょう。



グループで話し合い、情報を共有します

親は不安に思っているでしょうね。家庭訪問すればいいのにな。

初期対応に課題があるよ。



日常での学級での指導に課題がありそうだね。

私は、普段、遊びのルールは学級全体で話し合って決めているよ。



若い人は発想が柔軟だな。また続きを話したいな。
ベテラン教員



一人で悩まないで先輩に相談しよう。



いろいろな対応策があるんですね！勉強になります。

同僚性を高め、チームで対応していくといいですね。

4.まとめ

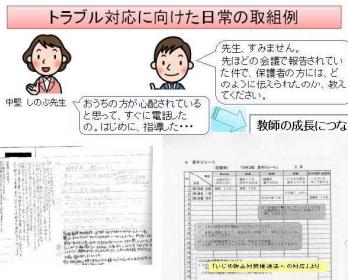


言葉を、贈り物(ギフト)を手渡すように使えるといいで
すね

3分



記録をこまめに取りましょう。次の担任の先生も助かりますね。



V 研究の結果と考察

1 授業（「応援ナビ！」第Ⅱ章 31 “特別活動”）における活用について

(1) 「第Ⅱ章 31 “特別活動”」の改善点

授業案作成後、授業者との打合せを行い、実態に合った内容に改善した。

表3 学級活動の授業内容改善点

	課題点	改善点
低学年	・ワークシートが分かりにくい ・解決策を一人で考えさせるのは難しい	出来事を時系列で追うだけでなく、セリフを入れることで、仲直りにつながる言動に転換しやすくした。 模擬授業から、2年生の1学期以前の時期だと、行為を振り返ったり置き換えたりするのに個人差が大きいことが分かったので、1つずつの出来事を、「自分で考える→近くの人と交流→発表」の手順で、各3分程度行うようにした。
	・自分の強み（よさ）の内容が一面的である ・本音を出させる発問に工夫が必要である	当初、いけないことをしている友達に注意するといった内容で5つのよさを考えていたが、決まったことに協力できるなど、一見消極的な態度もよさなのではないか、全員が選ぶことのできる内容にすべきなのではないか、といったスクールカウンセラーの意見を取り入れてワークシートを改善した。 問題文の登場人物のよくない言動を見つけてその対応を話し合わせる計画だったが、授業者が「自分たちは似たようなことをしていないのかな？なぜそうしてしまうのかな？」と問い合わせたところ、本音に近い発言が聞かれ、その後の話合いでも日常場面を意識した対応が出たので、この発問を展開に加えた。
中学年	・アイメッセージとユーメッセージの理解が難しい	板書計画で、主語を明示することで、両者の違いを明確にする。また、親子のやりとりが、児童にとっては身近で最も理解しやすい場面なので、展開中の例示を、友達との場面から親子の場面に変える。
	・自分で作ったセリフでのロールプレイが難しい	自分でもセリフは考えさせるが、時間内で全児童のセリフをチェックすることは難しいため、ロールプレイでは、準備した“アイメッセージ”で行わせる。
	・ワークシートを分かりやすくできると良い	全員で共有した“アイメッセージ”選択肢の“ユーメッセージ”を比較できるようにした。

(2) 「第Ⅱ章 “特別活動”」の成果と課題

授業者、参観者の感想から、児童の発達段階の課題に合った授業内容に改善できたと考える。

また、研究協力校で作成した特別活動の(2)の年間指導計画の内容にも合致させることができ、無理なく実施することができた。

<低学年授業後の、授業者の感想>

けんかの時自分を振り返ることのできる児童は少数で、ただ謝ればいいと思っている児童も多いです。この授業は、仲直りのチャンスはたくさんあること、そのチャンスをつかむためには深呼吸して落ち着いたりセリフを考えたりすると良いという、これまでの解決方法より一歩進んだ提案になっていると思います。また、低学年から言葉で伝える習慣を身に付けさせることは大事だと思いました。

<中学年授業後の、授業者の感想>

問題が日々の学校生活にあり得る設定なので、自分を重ねて考えやすかったと思います。こうした内容を授業で扱うことが大切で、いじめの未然防止になると思います。また、“よさ（強み）”の選択肢の幅が広いのがとても良いです。子どもたちは、“よさ”にはいろいろあることに気付けたようです。自己決定部分が吹き出しなのも書きやすく、明日からの行動に結びつけやすいと思いました。

<高学年授業後の、授業者の感想>

問題として挙げられている事例が、高学年の児童がよく経験する場面なので、話し合いやすい内容だと思います。この時期（5年生の11月）に扱う道徳や国語の内容、人権月間などの取組と関連させて行えたので、より効果的だったと思います。アイメッセージを使うことは難しいですが、これを機会に意識付けることでより良いコミュニケーションにつながると思いました。

本授業は、教職経験の浅い若手教員でも分かりやすいように「応援ナビ！」の別添資料として、授業における教師の全ての発問とワークシートを用意した。授業後の感想では、「そのまま使えるので大変便利だった」「中堅以上の教員は、発問などを自分で変更できるので、全発問が提示されているのは、若手教員にとってありがたいのではないか」といった声が聞かれた。

2 所属校若手教員への指導・助言場面での活用について

当初、「応援ナビ！」の内容は、課題によって解説の分量に差があった。そこで、知りたい部分を手軽に見ることができるように、1つの課題に対し、見開き1ページで完結するようにまとめた。これにより、指導・助言場面においても、資料として使いやすくなった。例えば、10月に研究協力校の若手教員が仕事全般について悩んでいた時に、「応援ナビ！」の“若手の先生はどんなことに悩んでいますか？（日常編 ナビ8）”を用いて相談に乗った。若手教員は、自分と同じ悩みを他の若手教員も抱いていること、担当学年によくある課題であることなどをデータから知り、勇気づけられたとのことだった。このように、その時々の課題に合ったページだけを用いることができるようになり、手軽になった。また、見開きページについても、読みやすさと使いやすさを第一に考え、どのページも「課題→関連するデータ→対応のポイント→解説」の流れになるように統一した。

3 校内研修での活用について

(1) 「校内研修プログラム」の改善点

校内研修プログラムの有効性を2回に分けて検証した。1回目の検証は、長期研修員を対象に実施した。その際のアンケートやスライドへの書き込みを通し、改善と修正を行った。その後、研究協力校で2回目の検証を行い、同様の振り返り調査を行った。

1回目に実施後のアンケートで、最も課題だったのが、「組織的な取組の必要性について理解できましたか」の項目であった。そこで、チームでの連携の必要性をより実感できるようにするためにには、構成を工夫する必要があると考えた。具体的には、「個への対応→組織的対応」の部分で軽重を付け、組織対応の部分のスライドのノートを長くし、重点化した。“なぜ連携が必要なのか”的部分の説明を補足したことと、2回目の検証においては“理解できた”が30%から91%に向上了した。グループワークで用いたインシデントプロセス法では、情報収集の場面で、参加者からの質問が予想したよりも少なかった。質問はこの事例研究法の最も重要な部分であることから、提供事例の内容を大幅に削り情報量を減らしたところ、2回目では質問がたくさん出て、グループ協議が深まった。1回目のアンケートから、2点目に課題であったのは、「ロールプレイを取り入れたことは、児童への対応の理解に役立ったと思いますか」の項目である。使用する言葉が難しいといった感想が聞かれたため、「言語化→言葉にする」「共有化→みんなで情報を持ち合い」といったように、平易な言葉に置き換えた。その結果“理解に役立った”が、30%から83%に向上了した。内容については、「感情の明確化」の理解が難しいという声が聞かれたため、スライドに「言葉にしていない相手の気持ちを考えること」という吹き出しを入れ、分かりやすくなるように改善した。

(2) 「校内研修プログラム」の成果と課題

- 「児童とより良く関わる上での参考になりましたか？」の質問項目で、91%の参加者が理解できたと回答し、基本的な関わり方の共通理解が図れた。
- 研修の実施が、今後の組織のよさを生かした対応の推進につなげることができた。

以下、参加者の感想から振り返る。

〈プログラムの設定について〉

「日頃の指導を振り返ることができた」「同じ様な事例が、今日起こったので、明日から生かしたい」「身近なこと、起こりそうな例だったので、具体的な対応の話合いができ、有意義だった」

〈プログラムの内容について〉

「変化のある内容だった」「ロールプレイを見て、子どもの声に耳を傾けることを実践していこうと思った」「トラブルの現場を客観的に見たり、その時の児童や担任の気持ちを聞いたりできてよかったです」

プログラムの中で取り上げた事例は、調査で得た実例であることから、日常の指導場面に近い研修にすることができた。

受講者が主体的に取り組める形態が効果的だった。ロールプレイの役割分担により、児童の気持ちの理解が深められた。

<ワークショップについて>

「普段何気なく行っている生徒指導も、改めて言葉にすると、自分が意識していたことや、先輩方の考えなどが分かり勉強になった」「言うのは簡単でも、できていないことも多かった。より良い学級づくりに努めたい」

グループワークにより、多面的な解決策を再認識できた。事後の聞き取りでは、各年代で、有意義な意見交流が図れ、互いに新たな気づきがあったようだ。

<日常場面の活用について>

「若い先生方に積極的に声をかけていこうと思う」「今まで支えたりアドバイスをくれたりした同僚がたくさんいたから、自分はここまで来られたと改めて思った」「手軽にできる事例研究だと思う」「全職員が参加するというのが、とてもよかったです」

組織的な取組に向けての意識を高められた。インシデント・プロセス法は、ケース会議で取り入れたり、職員室などの相談場面でも活用できることを伝えられた。

課題は、以下の2点である。

- 話合いの進め方を簡潔にできるように事前説明を工夫し、協議時間を確保する。
- インシデント・プロセス法は、参加者が提供した事例を使うと、より実践的になる。

VII 研究のまとめ

1 成果

- 授業における「応援ナビ！」の活用場面では、調査から得た課題に基づいた学級活動(2)の授業を構成できたことで、授業後の様子から児童の集団の中での自己有用感が高まった姿が見られた。
- 若手教員への指導・助言場面における「応援ナビ！」の活用では、児童との関わりをより良くするための工夫を提案することができたことが、研究協力校の若手教員の感想から分かった。
- 校内研修プログラムにおける「応援ナビ！」の活用では、小さなトラブルへの対応や予防策を話し合う中で、組織のよさを生かした対応への共通認識を高めることができた。

2 課題

- 引き続き若手教員との関わりを通して得た声を生かし、必要に応じた改訂を行い、若手教員の実態に合った「応援ナビ！」になるよう、内容の改善と充実を図っていきたい。
- パソコン上で見出しから検索できるなど、必要な項目を児童や保護者との関わりにすぐ生かせるよう、見やすさの工夫をしていきたい。

VIII 提言

1 若手教員が伸びる職員体制の構築に向けて

若手教員をはじめとする教職員の指導力は、気付いたことを積極的に交流でき、互いに学び合える職員体制の中で向上すると考える。そこで、中堅・ベテラン教員が若手教員に対して声をかけたり、授業を互いに参観し合ったりするなどの日常的な取組を継続していくことが、若手教員が伸びる手立ての一つとして挙げられる。

2 組織で取り組む生徒指導・教育相談に向けて

気になる児童とのかかわり方や児童同士が高め合う学級経営の工夫など、生徒指導・教育相談をテーマにした校内研修を年間研修計画に位置付けて実施し、成果や課題を共有することにより、職員の意識が向上し、組織で取り組む生徒指導・教育相談の実現につながると考える。

<参考文献>

- ・国立教育政策研究所 『生徒指導リーフ』シリーズ
- ・香川県教育センター 『教職員のためのサポートブック』(2011) 『達人が伝授!』(2014)
- ・群馬県総合教育センター 『トラブル防止マニュアル』(2010)
- ・森田 洋司 滝 充 秦 政春 星野 周弘 若井 彌一 編著 『日本のいじめ』金子書房 (1999)